

『視野狭窄にならず、複眼の思考を持つ』 ～ 厳粛な修練・訓練 ～

筆者は、2024年6月21日病理組織診断業務に赴いた。【顕微鏡でマクロからミクロの丁寧な観察 & 俯瞰的に 森を見て 木の皮まで診る】は、病理医としての『原点回帰』である。約45年間の病理医としての経験が、『がん哲学＝生物学の法則＋人間学の法則』&『がん哲学外来＝品性のある 強靱で 高貴な心の持ち方』の厳粛な修練・訓練ともなっている。

6月22日は、Zoom方式で南原繁研究会である(画像)。若き日に、全巻『南原繁著作集 1～10巻』熟読したものである。筆者は、2004年にスタートした南原繁研究会の3代目の代表を仰せつかった。昨年(2023年)11月3日(文化の日、学士会館に於いて)の『第20回南原繁シンポジウム：南原繁における政治と宗教 ～ 南原繁再考(その1) ～』の記録本が発行される。今年(2024年)は、『南原繁研究会創立20周年 & 南原繁没後50周年』である。

【南原繁(1889-1974)は、内村鑑三(1861-1930)と新渡戸稲造(1862-1933)から大きな影響を受けた。新渡戸稲造は、日露戦争後7年間、第一高等学校の校長を務めているが、南原繁は、一高で学び、影響を受けた。一高時代、南原繁は『聖書之研究』を読み始め、東大法学部に入学後、内村鑑三の聖書講義に出席するようになった。卒業後の南原繁は、内務官僚から学者に転進し、ヨーロッパ留学を経て東大教授となり、政治学史を担当、政治哲学を深めていき重要な著作を発表する。戦争中は社会的発言は意識的に控え、ひたすらに学問に打ち込む。その態度をして、『洞窟の哲人』と呼ばれたほどである。しかし1945年3月10日の東京大空襲の前日に法学部長に就任、日本の敗色濃厚となった中で、法学部の有力教授たちと終戦工作を相談し、重臣らと接触した。そして戦後、東大総長に就任、国家の再建を呼びかけ、戦後改革の理想を掲げて、ことに教育改革に主導的役割を果たして行く。】と学んだものである。

筆者は、南原繁が東大総長時代の法学部と医学部の学生であった二人の恩師からは、【南原繁は『高度な専門知識と幅広い教養』を兼ね備え『視野狭窄にならず、複眼の思考を持ち、教養を深め、時代を読む 具眼の士』】と教わった。

